

『華嚴經』に於ける普賢の十大願について

中 村 薫

はじめに

『華嚴經』では、到る所で菩薩の誓願が説かれている。「淨行品」に於ける百四十の行願⁽¹⁾、「十地品」初歡喜地に於ける十大願⁽²⁾、「十明品」に於ける十種清淨の願などがそれである。これらの各々の願は、新訳、旧訳ともに翻訳の異なりはあるが、内容的には大差なく説かれている。

ところで、今回、問題せんとする「普賢の十大願」とは如何なる内容を有しているというのか。実は、この十大願は、『貞元經』⁽³⁾（四十卷）の巻第四十に出ずるもので、旧訳（六十卷）、新訳（八十卷）には説かれていないのである。従来より、この『貞元經』は、新訳・旧訳の「入法界品」の別訳と理解されている。しかし、嚴密に云えば、今、新訳と比較してみると、新訳の巻第六十、第八十と、『貞元經』の巻第一、第三十九まではほとんど同じであるが、『貞元經』の巻第四十に限ってみれば、新訳にも旧訳にも見当らない。従って、「普賢の十大願」は、全く『貞元經』にのみ存在するのであり、而も『貞元經』に於いても新訳との比較よりすれば、この巻第四十のみは

『貞元經』編纂の折り新たに付け加えられたと見てよいであろう。故に、「普賢の十大願」を考察する場合、一応、新訳・旧訳から切り離し『貞元經』にのみに限定した方がよいように思う。そして、更に望月信享博士が、「されば普賢の十大願は元と三曼陀跋陀羅菩薩經に基き之を類別安排したものと認めなければならぬ⁽³⁾。」

と指摘されるが如く、この思想は比較的早い時期に提唱されていたことにも注意しなければならないであろう。

次に、もう少し『貞元經』卷四十を詳しくみていくと、長行文と偈頌との構成よりなっている。その長行文に於いて「普賢の十大願」が具体的に説かれ、続いて重ねてまた偈頌で十大願が説かれることになるのである。そして、特に、この重偈頌に関していえば、不空訳「普賢菩薩行願讚」と、旧訳を翻訳した仏陀跋陀羅の訳出による『文殊師利発願經一卷』として別に訳出されている⁽⁴⁾。

以上の点よりすれば、この卷第四十のみは殊くに別行流布しており、而もこの偈頌に限っていえば、もともと独立していたといっても過言でないであろう。

斯かる意味に於いて「普賢の十大願」が、特に『貞元經』の卷第四十の長行文に於いて説かれ、重ねて偈文に於いて説かれることに如何なる意味があるのか。今、高峯了州博士は次の如く述べておられる。

「そこでいまの第四十巻は長行と偈頌とより成るけれども、偈頌は本来独立していた普賢行願讚であり、これが入法界品に結合されるときに、先ず梵文のガンダヴユウハや蔵訳の華嚴經に見るような簡単な序述をもち、さらにその序述の内容が思想的に入法界品と行願讚とを連結する意味を盛るとともにそれが華嚴經の思想から裏づけられるものになってくる。ここに所謂普賢行願品の長行の内容たる十大願の思想が構成されたと考えられる。

それ故に十大願の思想はただ入法界品と行願讃とを結びつけるだけの連辭でなく、それによって行願讃をば華嚴經の結頌として意味づけるところの普賢行願の体系を示すものに他ならない。而して般若訳の第四十巻の一巻のみがここに独自の意味を有する所以である。⁽⁵⁾」

以上の如く、歴史的社会的に様々な変遷を経て結構された『華嚴經』も、その總体的内容を看取すれば、普賢行を開顯するものであるといってもよいであろう。それはまた、『大方広仏華嚴經』という経題によっても明らかなことである。

そこで、少し普賢行について考察してみると、華嚴宗第二祖智儼は『搜玄記』巻第四下で、旧訳『六十華嚴』の第三十三品「普賢菩薩行品」の名を釈す中で次の如く述べている。

「行周法界云レ普。體順調善称レ賢。菩薩是人。行者明レ因。行體從二義得レ名。」（大正35・78・c）

第三祖法藏も同じく品名を釈す中で次の如く述べている。

「二品名者徳周法界云レ普。用順成善称レ賢。撰徳表人名為二菩薩。対縁造修目之為レ行。普賢之行。普賢則行可レ知」（大正35・403・a）

普とは、仏の行徳が法界に周円する意味であり、而も単に法界に普遍するのみではなく、衆生の生死界に対しても普遍絶対であるというのである。また、賢とは、体用が成善に随順することを称し、而もその善は悪に対する善に止まるようなものではなく、悪障を除いていく用を有した善であり、結局、それは普遍絶対の用としての善でなければならぬのである。行は、縁に対して造修することをいい、それは飽くまでも善を実行するための因的行爲

をいうのである。故に換言すれば、普賢の名のもつ意味内容を明らかにすることが、そのまま大乘菩薩道の実践としての行そのものを開顯することに繋がるともいえよう。⁽⁷⁾

また、『孔目章』の「普賢行品普賢章」では次の如く述べている。⁽⁸⁾

「普賢者。大分有_レ二。一三乗普賢。二一乗普賢。三乗普賢者。一人二解三行。初人者。如_二法華經乘_レ象。至_二行者前_一。是其人也。二解者。如_二法華經廻_レ三帰_一。一。即是趣_二向一乗之正解_一。三行者。如_二法華經說_二普賢品明_一。普賢品明_二普賢行_一者即是。二一乗普賢亦有_レ三。一人。謂第四十五知識普賢者是。二解。即普賢品六十行門。各皆普遍。及漸次深深深深深深深深。及等_二因陀羅微細事等_一。三行。即離世間品十種普賢心。十種普賢願行法。如_レ文可_レ知。」（大正45・580・b～c）

普賢について、ここでは『法華經』で説かれる三乗普賢と『華嚴經』で説かれる一乗普賢とに分けている。先ず、『法華經』「普賢菩薩勸発品」で説かれている「是人若坐思_二惟此經_一。爾時我復乘_二白象王_一現_二其人前_一。」（大正9・61・b）と、「若有_下受持読誦正憶念解_上其義趣_二如_レ説修行_上。当_レ知是人行_二普賢行_一。於_二無量無遍諸仏所_一深種_二善根_一。」（大正9・61・c）の文をもって三乗普賢の人・解・行に分けて説いている。そして『華嚴經』で説かれる一乗普賢についても、人（入法界品に於ける第四十五の善知識としての普賢）・解（普賢行品の六十の行門）・行（離世間品の十種普賢心と十種普賢願行法）とをもって、やはり三種の解釈をしている。

さて、今一つ、「普賢の十大願」が、特に行願として説かれていることに注目しておきたい。『經』に、

「汝乃能入_二此三昧正受_一。是皆盧舍那仏本願力故。又汝於_二諸仏所_一清淨行願力故。」（盧舍那仏品、大正9・408・b）

とあるが如く、如来に於いて本願といい、普賢に在って行願というように、本願と行願とを明確に区別して説いている。斯かる点について、高峰了州博士は、

「普賢行は衆生の行として願に基づき願に於て如来の本願を受くるものなることが知られる。本願の立場に入ることによって衆生の行は普賢行となる。故に普賢行は必ず内に本願を含まねばならぬ。それが普賢の行願である。また行願なるが故に本願に基づくものでなければならぬ。普賢行は故に衆生の行にしてまた菩薩の行である。菩薩の行なるが故に本願に於て如来の行を行ずるものである。」⁽⁹⁾

特に普賢の誓願を本願といわず行願という所以は、衆生の行としての普賢行と菩薩の行としての普賢行とがあるからである。

以上の点を踏え、今回は特に『華嚴経普賢行願品第四十』（以下普賢行願品と略）の長行文に於いて説かれる「普賢の十大願」について検討を加えていくこととしたい。

十 大 願

普賢の十種広大の行願とは『普賢行願品』第四十（大正10・844・a）によれば次の如くである。

- 一、礼敬諸仏
- 二、称讚如来
- 三、広修供養
- 四、懺除業障
- 五、随喜功德

『華嚴経』に於ける普賢の十大願について

六、請転法輪

七、請仏住世

八、常随仏学

九、恒順衆生

十、普皆廻向

そこで、次に詳しく經典の長行文により十大願の一々について、第四祖澄観、第五祖宗密の両師の『華嚴經行願品疏鈔』（以下『鈔』と略）、ならびに『科華嚴經普賢行願品簡註』三卷（高野金剛峰沙門・龍雲空性録・日本大藏經第五卷・鈴木學術財団刊・昭48・一四〇頁〜一九八頁）を参考にして考察していくこととする。

一、礼敬諸仏願

經典に、

「善男子。言_レ礼敬諸仏_二者。_{（一）}所有盡法界。虚空界。十方三世一切仏刹極微塵数諸仏世尊。_{（二）}我以_二普賢行願力_一故。深信解。如_レ対_二目前_一。_{（三）}悉以_二清浄身語意業_一。常修_二礼敬_一。_{（四）}刹一一仏所。皆現_二不可説不可説仏刹極微塵数身_一。一一身遍礼_二不可説仏刹極微塵数仏_一。_{（五）}虚空界盡。我礼乃盡。以_二虚空界不可_レ盡故。我此礼敬無_レ有_二窮盡_一。_{（六）}如_レ是乃至衆生界盡。衆生業盡。衆生煩惱盡。我礼乃盡。以衆生界。乃至煩惱無_レ有_二盡故。我此礼敬無_レ有_二窮盡_一。_{（七）}念念相続。無_レ有_二間断_一。身語意業無_レ有_二疲厭_一。」（大正10・844・c 本文番号筆者）とある。

およそ、仏教にとって、礼敬・礼拝ということは重要な事柄であることに違いはないであろう。ところが、礼拝などの作法、あるいは意味内容についていえば、時代社会・民族国家などの異なりによって必ずしも同一とはいえ

ないようである。今、例えば『大唐西域記』巻第二をみてみると、

「致敬之式。其儀九等。一発言慰問。二俯首示敬。三举手高揖。四合掌平拱。五屈膝。六長跪。七手膝踞地。八五輪俱屈。九五体投地。凡斯九等極唯一拝。跪而讃徳謂之盡敬。遠則稽顙挥手。近則鳴足摩蹤。」（大正51・877・b）

の九等の別があるとしている。

①、言語を発して慰問する。②、首を俯伏して敬意を示す。③、両手を高く挙げて頭を深く垂れて会釈する。④、両手を胸部の前で重ねて拱き、礼をする。⑤膝を屈折してする礼。⑥、身体を伸ばしてひざまずいてする礼。⑦、手と膝とでもって地面に踞くまる。⑧、両膝、両臂と頭首の五輪を屈める。⑨、身体を地に伏せ、両手両足を地にのべ、頭を地につけて敬礼し、これが帰依して恭敬礼拝する時の最高の形としているのである。

以上、インドに於ける実際の敬礼の種々なるすがたを述べたものであるが、今、ここでいう礼敬諸仏の礼敬とは如何なることであろうか。澄観は『華嚴経行願品疏』（以下『疏』と略）で、

「由心恭敬。運於身口。而遍礼故。除我慢障。起敬信善。」（正統、一・七・四・三八〇、左上）と述べている。

礼敬とは、心中よりの恭敬によって身・口を運んで遍礼し、而も我慢等の慢心の障礙を除いて敬信の善を起こすことをいうのである。

次に同じく、

「勒那三藏。説^二七種礼^一。今加^レ爲^レ十。謂我慢礼。如^二碓上下^一。無^二恭敬心^一。二唱和礼。高聲誼雜。辭句渾乱。此二非儀。三恭敬礼。五輪著地。捧^レ足殷重。四無相礼。深入^二法性^一。離^二能所相^一。五起用礼。雖^レ無^二能所^一。普運^二身心^一如^レ影。普遍礼不可礼。六内觀礼。但礼^二身内法身真仏^一。不^二向外求^一。七実相礼。若内若外。同一実相。八大悲礼。随^二一礼^一。普代^二衆生^一。九総撰礼。撰^二前六門^一。以爲^二一觀^一。十無盡礼。入^二帝網境^一。若仏若礼重重無盡。」(正統一、七・四・三八〇・左上↙左下)

と、勒那三藏の説く七種の礼に大悲・総撰・無盡の三種の礼を加えて十礼を説いている。

①、我慢礼とは、碓の上下するようなもので恭敬の心がなく

②、唱和礼とは、高声喧雜の礼であり、

以上の二礼は非儀のため用いないという。

③、恭敬礼とは、身心五輪（五体）を地面に着け、足を捧持して殷重にすることである。

『鈔』では、この第三礼は、人天・二乗・權教・大衆・六度の菩薩等の礼に通ずとし、その後、

「殷重意業也。発願及称名讚歎即語業也。五輪即身業也。故三業備也。」(正統一、七・五・四四四・右上)と、段重を意業、発願、称名讚歎を語業、五体を身業に配している。

④、無相礼とは、深く法性に入つて能相所相の相をそれぞれ離れることをいう。

⑤、起用礼とは、能所の相が無いとしても、善く身と心とを運び、影の如く不可礼の如来を普く礼することをい
い、就中、空より仮に入り、体により用を生起することをいう。

⑥、内観礼とは、身内の法身真仏を礼し、決して外に向って求めないことをいう。これは空飯を計ずして、直ちに本覚真性を見ることを意味するものである。

⑦、実相礼とは、非空・非不空・非礼・非不礼にして、内の真仏を取らず、また、外の仮仏も棄てずして、而も自然に法界に冥々して常に諸仏を礼するが故に内外同一実相というのである。

⑧、大悲礼とは、実相礼では大悲物我を顯示するに至らなかったのに対し、今は同体の大悲をもって、物我無二を明かし、一々の礼は皆な衆生に代ることをいうのである。（ただし、第一、第二は邪であるから、三・四・五・六・七・八の礼を六門としている）

⑨、総摂礼とは、前の六門の深淺の礼を総摂として一観として、事々無礙普賢行願の礼というのである。

⑩、無盡礼とは、帝網境に入り、能礼所礼それぞれ重々無盡であるという。

以上の点より、第三礼より第十礼までの八礼は、仏身、あるいは自身の中の法身仏等を礼敬するもので、勒那三藏は、その中の第五六七の三礼をもって真としている。一方、澄観は、最後の無盡礼をもってその致極としている。また、宗密は、更に『鈔』に於いて五教に配して次の如く述べている。

まず、第一第二は邪にして配せず、第三は第一小乗教と第二始教の終門に通ず、第四は第二始教の始門に当る。第五は第三終教の始門に当る。第六は第三終教の終門に当る。第七は第四頓教に当る。第八・第九・第十は第五円教の礼であり、就中、九・十の二門は別教の礼である。（以上、正統一・七・五・四四三左下、四四五右上に詳説せり）

次に、(一)の文について『疏』では「所礼の境」を明かすものとして「横歎普周。盡帝網境」(卍統一・七・四・三八〇左下)と述べている。帝網とは、帝釈網のことで、因陀羅網と同義である。つまり、帝網の線と珠玉とが重々無盡に交錯し合い、而も珠玉と珠玉とが相互に反映し合う関係を用いるのである。華嚴教学ではこの譬喩によって、一切諸法も重々無盡になっており、それが相即相入して、一即一切、一切即一を顯わすものであるとしている。そして、今は、虚空界にあって、具体的に十方三世に於ける一切仏刹の極微塵の数と同数の諸仏世尊の名が列挙されるのである。

(二)の文について、『疏』では「能礼の因」を明かすものとして、

「一以普賢願力。此即法力。不依行願不能徧故。二深信解力。此即自力。謂印持諸仏。徧於時處。如對目前。」(卍統一・七・四・三八〇、左下)

と二因を挙げている。つまり、普賢行願力を法力、深信解力を自力としているのである。今、この法力、自力の二義を立てることについて『鈔』では、

「為緣親疎。故分法力自力。法即緣也。自即因也。若以緣奪因即法力故融通普遍。若以因奪緣則自力故融通普遍。今以因緣雙明。故齊拏法力自力也。」(卍統一・七・五・四四五・右下)

と端的に述べている。つまり、因縁の親疎に約して、法即緣、自即因と二分し、法本如是の境を縁とし、その境を決定印可する信解を因として、無尽の敬礼を行ずることに於いて普賢行願力というのである。そして、その二因の義はどこまでも融通無礙であるというのである。

(三)の文については、『疏』では「能礼の相」を弁ずるものであるとして「謂三業皆徧常無間故」(正統一・七・四・三八〇、左下)と述べている。ところで、この場合の清浄とは如何なることであろうか。今、『鈔』に次の如くある。

「清浄三業者簡ニ異染業ニ也。謂身無ニ三惡ニ口離ニ四過ニ意三業浄故云ニ清浄等ニ也。」(正統一・七・五・四四五・右下ノ左上)

身に地獄・餓鬼・畜生の三惡が無く、口に妄語・結語・惡口・兩舌の過を離れ、意の三業が淨いたために清浄というのである。そして、この清浄の三業の用に於いて皆な悉く無間であるというのである。

(四)の文について、『疏』で「一仏之前頓現ニ多仏身ニ一身之礼。等ニ刹塵數。是周遍相」(統正一・七・四・三八〇・左下)と、一仏の前に頓として多身を頓現し、一身の中に徧く多仏を礼するというのである。つまり、一々の仏に微塵數の身を頓現し、一々の身に微塵數の仏を礼することは徧えに礼敬諸仏の普賢行そのものであるというのである。

(五)の文について『疏』では「先頓ニ無盡。後彰ニ無間。前中准ニ十地經。有ニ十無盡界。」(正統一・七・四・三八〇左下)と、敬礼の無尽を頓わすものとして、以下「十地品」の初歡喜地に於ける菩薩の十大願の後の十盡句(旧訳では十不可盡句という)をもって大願の無盡を頓わそうとするのである。今、「十地品」(大正10・182・b)に於ける十盡句の名のみ挙げれば次の如くである。

一衆生界盡

二世界盡

三虛空界盡

四法界盡

五涅槃界盡

六仏出現界盡

七如来智界盡

八心所縁界盡

九佛智所入境界盡

十世間転法転智転界盡

以上の十盡句は、衆生界等の盡きることがないのと同様、菩薩の願も盡きることがないものである。今はそのうち、特に虚空界盡の一句をもって敬礼の窮盡有ることなきを顯わすのである。

(六)の文は、更に衆生界盡の一句を挙げ、衆生界より業惑煩惱が開出され、それらが盡きることがないので、敬礼も同様に盡きることがないというのである。

(七)の文は、願の不斷なることを顯わしている。つまり、清淨の身口意三業は疲倦も厭足もないことを顯わし、以下の九門についてもそれぞれ同じく無盡を顯わしているのである。

以上、この礼敬諸仏とは、清淨の三業をもって、礼敬を嚴修し、十方三世の諸仏世尊に対して目前に対するが如く、未來際に盡して窮盡せんとする大願をいうのである。^(四)

二、称讚如来願

称讚如来の名体について考察するに当り、今、称讚については『鈔』では次の如く解説している。

「称謂称述讚即讚揚称「述聖德」讚「揚其美」。又称謂称揚讚即讚歎。」(正統一・七・五・四四六、左上)

称とは称述と称揚の二義があり、讚も讚揚讚歎の二義があるというのである。そして、総じて、称讚とは、音声

言辭を体として、而も微妙弁才をもって称揚讃歎することである。

次に如来については、同じく『金剛經』⁽¹³⁾『涅槃經』⁽¹⁴⁾『成実論』⁽¹⁵⁾などによって述べている。つまり、如来とは仏の十号の一つで、真如より来生するものの意と解しているのである。

『疏』では、以下、「所讃境」、「能讃因」、「能讃相」に分けて明らかにしている。

以上、この称讃如来とは、一々の舌根より無盡の音声海を出し、一々の音声より一切の言辭海を出すという。この様に繁多深奥な海に喩えられた称讃は、盡未來際一切如来の諸々の功德海を称揚讃歎せんと志願することを顕わしているといえる。

三、広修供養願

『經』に、

「悉以_二上妙諸供養具_一。而為供養。所謂華雲鬘雲。天音樂雲。天傘蓋雲。天衣服雲。天種種香塗香燒末香。如是等雲。一一量如_二須弥山王_一。然_二種種燈酥燈油燈諸香油燈_一。一一燈炷。如_二須弥山_一。一一燈油。如_二大海水_一。」
(大正 10・844・c ~ 845・a)

とある。

ここでは諸々の供具に種々の雲、種々の香、種々の燈があると説くのである。

『華嚴經』に於ける普賢の十大願について

①、雲天について『鈔』では、

「皆云_レ天者表_三法界中法爾自然有_二如_レ是不思議徳用_一也。天者自然義。皆言_レ雲者是隨_レ縁義表_下由_二行願力_一故法如_レ是故_上也。」（_レ統一・七・五・四四八、右上）

と釈している。天とは天然とか自然とかの義であり、不可思議の用を表わすものである。一方、雲とは隨縁の義であり、菩薩行願の縁によって重々無盡の内容を表わしているのである。

②、香、就中、塗香について、『鈔』では、

「云_二塗香_一者謂和_二合諸香_一用_二塗身手_一供養六時当_レ作_二是念_一我獻_二塗香_一願從_二此等流_一」（_レ統一・七・五・四四八・右下）

と釈している。これは供養の時の作法の一つであるが、諸々の香を和合して、身体や手に塗って用いる香のことである。

③、燈、就中、酥燈とは、乳を精練してできた酥と油とを和合した仏燈のことである。

以上の如く、種々なく雲天、香、燈が、大海水の如くであると喩えることについて、『鈔』では、

「言_二如大海水_一者以表_二供養称_レ理故深。称_レ事故広_一。以_二深広_一故喩_レ之如_レ海也。」（_レ統一・七・五・四四八・左上）

と釈している。供養について述べるに当り、事と理で示せば、理で称量すれば深いものであり、事で称量すれば広いものである。この深広でもって海に喩えるというのである。

次に『經』に、

「諸供養中。法供養最。所謂如說修行供養。利益衆生供養。摂受衆生供養。代衆生苦供養。勤修善根供養。不捨菩薩業供養。不離菩提心供養。」（大正10・845・a）

とあり、七種の供養のあり方について述べている。

以上、総じて法と財の二供養あるというけれども、結局、如說修行供養などの七つの法供養が最勝の供養であるとして、広く供養を行ぜんと願する大願を広修供養願というのである。

四、懺除業障願

懺除とは懺悔と同義とみてよいであろう。そもそも懺悔とは『疏』に、

「懺者梵音具云懺摩。此云悔過。若別說者懺名陳露先罪。悔名改往修來。除惡業障。成淨戒善。」（正統一・七・四・三八一・右下）

とあるが如く、梵語の懺摩 (ksama) の音写である。特に懺そのものは (ksama) の音写であるとともに、ゆるしを請う意であり、一方、悔そのものは (ksama) の意訳であるとともにくやむことである。この様に (ksama) は、しばしば悔・忍恕・懺悔と漢訳され、総じて人にゆるしを請うこと、ゆるすことの意味となっている。¹⁰⁾

次に業障の業についていえば、根本的には身・口・意の三業をいうのであるが、今、『疏』では、

「即是業有三三種」。一善惡不動。今唯取惡。二現生後。」（『統一・七・四・三八一、左下』）

と、二つの三種業をもって業の体としている。つまり、『疏』によれば、業に善惡不動（色界無色界の業）業の三種があるが、善・不動の二業は懺除の必要がないため、ただ惡業のみを指すという。そして、現報生報後報の三種については、皆な懺除すべきであるというのである。

元々、無明無始なる世界よりすれば、所造の業も無始であることにより、『經』では「我於過去無量劫中」というのである。

続いて、『鈔』でも『疏』の説を承けて、特に懺悔の相について、事懺（小乗・大乘教により作法を整えて懺悔を行ずること）と理懺（罪性空を諦観して滅罪すること）の二懺⁽⁴⁷⁾に別け、また、遮罪（作法事懺を用いること）と性罪（事理双懺を用いること）とに分けて詳説している。

何れにしても、ここで重要なことは、懺悔とは、単に惡業の障を除滅して、淨戒善を成就するのみではなく、広く三障を懺除して正に依り具足の果を得ることを意味しているのである。而るに、諸々の惡業について、『經』では、もし体相が有れば虚空界にも満ちるであろうし、同時にまた懺悔の功德も虚空界に満ちるともいえるという。もちろん、惡業は妄念妄想より生起し、本来無自性であるから、誠心誠意懺悔すれば如何なる罪業も滅除されるというのである。

ところで、今、『經』の、

「誠心懺悔。後不復造。恒住淨戒。一切功德。」（大正10・845・a）

について、『鈔』では『淨名經』で説かれる慚愧・恐怖・厭離・發菩提心・怨親平等・念報仏恩・觀罪性空の七種の心を方便すると説いている。そして、『疏』を承けて懺悔は、自解と尅責と怖畏惡道と不覆瑕玼とを含むとしている。

次に「恒住淨戒」については『疏』に、

「修_レ功補_レ過。匪_レ移_二山岳_一。豈_レ填_二溝壑_一。」(正統一・七・四・三八一、左下)

とあり、懺悔とは、単に罪惡の行為をしないというような消極的なことではなく、むしろ積極的に一切の功德を積むことを願わすものである。

以上、この懺除業障の願とは、無始曠劫よりの貧欲・瞋恚・愚癡の三毒の煩惱による諸々の惡業を憶念し、諸々の菩薩の面前に於いて清淨の三業をもつて誠心誠意に懺悔し、そして、後に積極的に再度罪業を造ることなく、恒常として淨戒に住処せんとする大願をいうのである。

五、隨喜功德願

隨喜とは、一般的に「他人が善き行ないを修して徳の成ずることを喜ぶこと。他人の善き行ないを贊嘆すること。他人の善事を見てともども喜ぶこと。滅罪の修行としての懺法などのこと」として説かれている。今、『鈔』では「得_二大眷屬_一翻_二嫉妬障_一。」といい、自他平等の善心を体として、自他共に喜ぶ所以としている。これは見聞の

善に随順して歎喜することであり、『鈔』では続いて「随喜」について四義挙げて述べている。

(1)、喜如来善

『經』に、

「所有盡法界。虚空界。十方三世一切仏刹極微塵数諸仏如来。從初發心。為一切智勤修福聚。不_レ惜身命。經不可説不可説_二仏刹極微塵数劫_一。一一劫中。捨不可説不可説_二仏刹極微塵数頭目手足_一。如是一切難行苦行。円満種種波羅蜜門。證入種種菩薩智地。成就諸仏無上菩提。及般涅槃。分_二布舍利_一。所有善根。我皆隨喜」(大正10・845・a、b)

とある。

初發心を因とする仏道修行は、総べて仏果一切智を求めるための大心によるに外ならない。そして、頭目手足の身体全体を捨して難行苦行を修行し、布施・持戒などの六度・十度乃至八万四千の波羅蜜の法門を円満にして、菩薩十地の智地に入るのである。なお、特に「般涅槃分布舍利」について『鈔』では、

「遺形普濟言_二般涅槃_一古譯云_二入滅_一総有_二四種_一。如_二下所引此即_一應滅謂衆生無_レ感_二應盡還_一源大悲重修分_二布舍利_一。普使_二群情滅_一罪生_二福也_一。言_二分布舍利_一者如_二西域説_一如来寂滅人天悲感盛_二七宝棺_一……」(卍統一・七・

五・四六〇、右上)

と、滅後の利益を挙げ、それに四種ありとしている。つまり、般涅槃とは、旧訳で入滅、新訳で円寂と翻しているが、それが衆生利益となるのに、『西域記』を引いて、無憂王の八万四千の塔を建立して舍利を供養するが如きで

あると述べている。

(2)、喜諸趣善

『經』に、

「及彼十方一切世界、六趣四生。一切種類。所有功德。乃至一塵。我皆隨喜。」（大正10・844・b）とある。

六趣とは、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天のことで六道と同義であり、人間の存在のあり方をいうのである。四生とは、生誕の仕方の相違により、胎生・卵生・湿生・化生の四つに分類され、総じて迷いの世界のあらゆる生きものをいうのである。『鈔』では、

「明ニ六趣四生善・中言ニ六趣ニ者趣謂趣向求レ生者所ニ趣向ニ處也。」（正統一・七・五・四六〇、左上）と述べている。六趣とは趣向を頭わし、四生とは趣向せられる處を頭わすというのである。

(3)、喜二乘善

『經』に、

「十方三世一切声聞。及辟支仏。有学無学。所有功德。我皆隨喜。」（大正10・845・b）とある。

声聞（仏の声教を聞いて四諦の理を悟る）辟支仏（仏の声教によらずに独自に悟るため独覺ともいい、また、十二因縁を觀じて覺りを悟るため緣覺ともいう）のうち、声聞の二乘因向、緣覺の唯一果向は有学であり、声聞の第

四果と縁覺の辟支仏果は無學である。

以上、十方三世に於いて、二乗の善を随喜するというのである。

(4)、喜菩薩善

『經』に、

「一切菩薩所修無量難行苦行。志求無上正等菩提。广大功德。我皆随喜。」（大正10・845・b）

とあるが如く、菩提心を求めることに於いて、随喜の功德の廣大なることを説いているのである。

以上、随喜功德の願とは、諸仏如来の初発心より、分布舍利に至るまでの一切の功德善根、及び菩薩・声聞・辟支仏、そして六趣四生に至るまでの所有の功德を悉く皆な随喜せんと願する大願をいうのである。

六、請轉法輪願

ここは、次の第七請仏住世願と共に、勸請に対応して説かれる。つまり、今の請法に対して請人。従って、請法は成道するのに對して請人は涅槃の時に限る。請法は仏菩薩に對して二乗を標榜しない。そして、請人は仏菩薩二乗等に通ずるという。

今、ここでは、誹謗法障を除いて慈善根を起こす得益があるという。

次に轉法輪について『鈔』では八門に分別して説いている。⁽²⁾ 八門とは、名義・弁体性・種類・転相・分齊・転處・

転時・転主をいう。その中、特に名義について、

「初釋名義者於中有二。一約_レ所転二就_二能転_一。且初言_レ法者軌持義通_二教理行果_一。輪者所成義。……」

(正統一・七・五・四六二、右上)

と述べている。

転に所転能転の二転がある。法とは軌範を持する義で、教理行果の四に通じ、輪とは所以の義である。『鈔』では続いて、小乗について、速疾義・有取捨義・降伏義・鎮已伏義・上下転義の五義をもって法輪を約している。また、大乘に約して、円満義・摧壞義・鎮遏義・不定義の四義を挙げてそれぞれ詳説している。そして、能転については、展転伝授の義にして、過去仏がそれぞれ相伝して現在に至り、そして未来に向って伝授し続けていく、そこに能所が一つになるため転法輪と名づけるとしている。

次に『經』に、

「而我悉以_二身口意業_一。種種方便。慇懃勸_二請_二転妙法輪_一。」(大正10・844・b)
とある。

元々、釈尊は自らの成道の内容を機根の異なる衆生に説くことを躊躇された。ところが、梵天の勸請によって説法教化を決意されたのである。その請ということに、随縁と称性の二請があるという。今、特に称性の請とは、恒に一切の音声が空や谷に響くが如く縁起無性の理を悟り、また、非断非常などの一々の事がすべて真実であり、法界に非ざることなきを悟ることである。それは既に、聞に所聞なく、終日法を聞くことを意味しているのである。

故に菩薩は無始曠劫より常に勧請し続け、また、諸仏は昼夜の時と、説法の場所と、対告衆とを問わず、常に説法し続けているのである。

以上、請転法輪願とは、正覺を成じたすべての諸仏に対し、身・口・意の種々の方便をもって、慇懃に妙法輪を転ずることを勧請せんとする大願をいうのである。

七、請仏住世願

勧請に関して、法蔵は『探玄記』で『智度論』の文を取意して次の如く述べている。

「三勧請者。智論説勧請諸仏有二。謂初成道時勸請轉法輪。般涅槃時勸請久住世間。雖知諸仏而自知時。然生勝福故須勸請。」(大正35・254・a)

(一)は前述した如く、仏の成道に際しての説法教化の勧請であり、(二)は仏の入滅涅槃に際しての諸仏の常住の世を勧請することである。今、(二)の場合の勧請は、単に仏の寿命を延促したり、永遠不滅の仏を望むのではない。

『鈔』に、

「衆生心淨見仏常住。衆生心垢見仏捨命。仏無生滅。随機見殊故知心淨觀仏。仏則常住為真勸也。」

(正統一・七七・五・四六四、右下)

とあるが如く、衆生の淨心をもって仏を觀すれば、それは法性を觀することと同じであり、必ず仏の常住の相をみ

ることができるという。そして、無量の勝福を得ることができ、それこそが真に諸仏住世であるというのである。
ところで、仏とは本来的に常住なることをいう筈なのに、改めて請仏住世を願うことに如何なる意味があるというのか。

『鈔』に、

「然仏出世及般涅槃相對弁者有二意。一約実義。二約對機。実義有三。謂円宗中三諦釈也……」

(記統一・七・五・四六六、右上)

とあるが如く、実義と對機の二意を挙げて述べている。

実義に約した場合、三諦の釈がある。(1)、縁性即空の真諦、これは出世もせず、涅槃も有ることがない。(2)、法界縁起の俗諦、これは念念に出現して念念に入滅することである。(3)、法界の実体である第一義諦、これは常に世に住し常に涅槃寂滅にして、寂而常照を住世となし、一方、照而常寂を涅槃となすことである。

次に、對機に約した場合、機縁を感じれば則ち菩提樹下に出現し、機縁が盡きれば、則ち雙樹林の間に入滅するという。今の勸請住世はこの對機門に当る。

以上、請仏住世とは、衆生界に於いて涅槃を示現しようとしている諸仏如来と、及び一切の善知識に対し、どこまでも衆生を利益するために仏として常住であり、涅槃に入らないようにと勸請する大願をいうのである。

八、常随仏学願

常随仏学とは『鈔』に、

「常随仏学者謂托_レ仏從_レ因至_レ果所_レ歷之行。所_レ為之事以為_二所緣之境_一。」（_二統一・七・五・四六六、左下_一）とあるが如く、仏の因より果に至る一切の歴行の業を所縁の境とすることを顕わしている。そして、この第八常随と第九恒順とは廻向の中の別義であり、『鈔』では、

「二利行体者常随仏学。自利恒順衆生利他也。」（_二統一・七・五・四六六、左下_一）

と示しているが如く、常随を自利、恒順を利他とし、この二利の功德を三處に廻向するのが第十普皆廻向であるという。故に隨学の眞の相は、仏の苦行の歴劫の境地を常に自身の心のうちに保有するため、苦を畏れず、樂に執著することなく不退の修行を行ずることを意味するのである。

次に『經』に、

「如_二此娑婆世界。毘盧遮那如来_一。」（大正10・845・c）

とある。

娑婆とは、忍土、堪忍土のこと、この現実の穢土の世界をいう。ところで、もし穢土の名であれば、仏名も釈迦仏でなければならないのに、何故、今ここでは毘盧遮那如来_{（28）}というのであろうか。もともと、毘盧遮那仏は報身

仏であり、その建立の土は蓮華藏世界でなければならない。それを娑婆世界の毘盧遮那ということの意味について、一応、『鈔』では二義挙げている。

「雖_ニ華藏世界正_ニ十身之依報_一。而娑婆界不_ニ相離_一。即最中香水海二十重中第十三重是此娑婆也。意明_ニ即此穢土衆生可_ニ以造觀修習_一。又仏本不_レ離_ニ穢土修證_一故。界拳_ニ娑婆_一。而所_レ歸之仏便須_ニ称_レ実円見_一故。仏拳_ニ光明遍照_一即依正中真影略耳。」(正統一・七・五・四六七、右上)

新訳八十卷本の「華藏世界品」に於ける最中香水海二十五重中の第十三重は娑婆を説いたものであるという。そして、十身具足の毘盧遮那仏の居住する蓮華藏世界は娑婆を離れたものではないといい、その理由について、(1)穢土の衆生造觀修習すべきことを願わして娑婆を挙げ、(2)仏の修行の自内証は、もともと穢土を離れたものではないから依報の娑婆を挙げ、而も歸する所の究極は真実の仏を円見することにあるから、光明遍照の毘盧遮那仏を挙げ、これをもって真影略するといっているのである。

次に『經』に、

「從_ニ初発心_一。精進不退。以_ニ不可説不可説身命_一而為_ニ布施_一。剝_レ皮為_レ紙折_レ骨為_レ筆。刺_レ血為_レ墨。書_ニ寫經典_一。積如_ニ須弥_一。為_レ熏_レ法故。不_レ惜_ニ身命_一。」(大正10・845・c)

とある。

『鈔』(正統一・七・五・四六七、右下)では、発菩提心の相に、一親近善友、二供養諸仏、三修習善根、四志求勝法、五心常柔和、六遭_レ苦能忍、七慈悲深厚、八深心平等、九愛_ニ樂大乘_一、十求_ニ仏智慧_一の十種の事のあるこ

『華嚴經』に於ける普賢の十大願について

とを説く。精進については、一被甲精進、二善法精進、三利樂精進の三種ありとし、同じく不退についても、信不退・位不退・証不退・行不退の四種ありとしてそれぞれ詳説している。

次の書写の行について、『鈔』では、隨相釈と觀智釈の二説ありと次の如く述べている。

(1) 隨相釈とは、

「不_レ惜_二身命_一。剥_レ皮析_レ骨或雖_二竹帛紙墨_一不_レ少要。須_二重_レ法苦_一身以展_二誠敬之志_一所以如_レ此也。」(卍統一・七・五・四六七、左下)

とあるが如く、法を重んじて身体を苦しめ、誠敬の大展々するために皮を剥いで紙とし、骨を折って筆とし、血を刺して墨となすこともあり得ると述べ、以下、『集一切福德三昧經』で説かれる、最勝仙人と天魔との間に於ける、仏偈を聞くためには身命を惜しまないという説話を引用して述べている。

(2) 觀智釈とは、

「觀_二察此身_一。若皮若骨都無_二定実_一。拳体全空無_二我我所_一雖_二目觀_一似有之相。而乃如_二聚沫_一如_二泡如_一燄如_二芭蕉_一。既無_二自体_一元同_二法界_一。如_レ是一一推徵三諦具足成_二空假中之三觀_一。詮_二此義_一時生_二得此解_一。契_二合円機_一。便是寫經。經是詮表生解義不_レ觀不_レ推即心迷取_レ相是無經也。」(卍統一・七・五・四六八、右上く右下)

ということであり、衆生の身体そのものは決して定相なるものではなく、すべて無自性空なるものであり、それを觀智するところに寫經の意味が存在するというのである。

次に『經』に、

「或處ニ一切諸大菩薩衆会道場。或處ニ声聞及辟支仏衆会道場。或處ニ転輪聖王小王眷属衆会道場。或處ニ刹利及婆羅門長者居士衆会道場。乃至或處ニ天龍八部人非人等衆道場。」（大正10・845・c）

とある。

ここでは、①菩薩、②二乗、③諸王、④族姓、⑤天、などの五種の衆会を挙げている。仏はこれらの五種類の会道場に於いて、それぞれの機類に相應して仏身を現じて法を説くというのである。

以上、常随仏学とは、毘盧遮那如来が、初発心より精進不退にして菩提樹の下で正覺を成じ、自からそこに静止することなく、種々の機類の異なる衆会に處して衆生を成就し、涅槃入滅に至るまで、一切皆随学しようとする志願をいうのである。

九、恒順衆生願

『鈔』に、

「恒順者諸仏因果之行。可レ宗可レ慕。順ニ於真理ニ故。」（正統一・七五・四七〇、右上）

とあるが如く、恒常として衆生に随順応同することをいう。そして、特に順ということは、常に同体の大悲をもつて自他を融通することを意味し、而も衆生と仏とが一如であることを顯わしているのである。もし、衆生を定有と執著し、また定無と執見したならば、そこでは真理と異なってしまう。故に衆生の実体と阻隔するためそれを非順と名

づけるという。今、非順でなく恒順ということとは、普賢行の願力をもって衆生の無性縁起・縁起無性・非斷非常を知了することを顯示しているのである。更に第八を常隨仏学、第九を恒順衆生という意味は、前者は諸仏の行徳として仰崇するために諸仏に合わせ、後者は迷妄に顛倒して做学すべきではないために衆生に合わせているからである。

『經』に、

「於諸病苦。為作良医。於失道者。示其正路。於闇夜中。為作光明。於貧窮者。令得伏藏。」（大正10・846・a）とある。

仏教にとって、救済ということは大変重要な事柄の一つである。それに世間的な救いと、出世間的な救いとがある。今、良医についていえば、病苦を救うことは世間的救済であり、法身常住ならしめることを出世間的救済というのである。そして、海・陸・山・野などに於いて道を迷失した場合にもそれぞれ世間、出世間の救済があるという。つまり、道に迷った時に正路を顯示し、暗闇に於ける光明、貧窮に於ける時に土中に埋伏する宝蔵を得るようなものである。（この場合、出世間的救済に於ける伏蔵は本覺眞性を指す）

更に『經』に、

「菩薩如_レ是平等饒_ニ益一切衆生_一。何以故。菩薩若能隨_ニ順衆生_一。則為_四隨_ニ順供_ニ養諸仏_一。若於_ニ衆生_一。尊重承事。則為_四尊_ニ重承_ニ事如来_一。若令_ニ衆生_一生_ニ歡喜_一者。則令_ニ一切如来歡喜_一。」（大正10・846・a）とある。

菩薩には、一切衆生に対して、貧困病苦の差別を超え、平等に饒益すべき大願が保有されている。²⁴つまり、菩薩

の大願は衆生に順ずると同時に仏にも順成し、同体大悲の義を有するのである。今、『鈔』では、

「更^ニ海印之喻^ニ以明如^ニ香水海澄淨^ニ須弥日月四天下中種種衆生国土居處屋宅皆於^レ中現。若執^ニ此像是有^レ命之衆生有質之世界。是乖^レ像也。非^ニ唯乖^レ像亦乖^レ海也。必須^ニ定知^ニ此像一一具^ニ鹹濕元体及不^レ宿^ニ死屍^ニ等十種之德^ヲ」(正統一・七・五・四七二、右下)

と、順衆生即順仏であることを海印の喩で顯示している。つまり、もし海中に在る像を実物であると執見したならば、像の本性としては適當でないし、海に導しては乖背することにもなる。故にこの一々の濕性鹹味、及び海の十徳を具足することを知って始めて像に順じ、海に順ずるというのである。今、海を諸仏如来、像を衆生に喩えてみれば、如来(海)所具の衆生(像)を歎喜させることができれば、能具の如来もまた自ずから歎喜することとなり、これをもって法身同体の恒順衆生の本旨というのである。

また、『經』に次の如くある。

「譬如^下曠野沙磧之中。有^ニ大樹王^一。若根得^レ水。枝葉華果悉皆繁茂^上。生死曠野菩提樹王。亦復如^レ是。一切衆生而為^ニ樹根^一。諸仏菩薩而為^ニ華果^一。以^ニ大悲水^一。饒^ニ益衆生^一。則能成^ニ就仏菩薩智慧華果^一。」(大正10・846・a)

衆生が、無明の煩惱に覆われているため、仏菩提の力用のないことを沙磧中の大樹に比較して説いている。そして、大樹の根より水を得れば、枝葉より華果を生じるが如く、一切衆生も大慈悲を感じることができれば、禪定より万行の華を成就して仏果を証悟することに喩えているのである。つまり、これは煩惱即菩提の理を説いているといえる。更に、衆生を饒益して、仏提の華果を成就せしめることについて、『經』では、

「若諸菩薩。以三大悲水。饒益衆生。則能成_二就阿耨多羅三藐三菩提_一故。」（大正10・846・a）と説いている。

凡仏一体の大悲は、菩薩が衆生の樹根に大悲の水を灌ぐが如く、自身の菩提を成就する光明から随順の行を修するといふのである。つまり、諸仏如来の大悲が成就されるという事実は、衆生にそれが饒益した時始めて成就するのである。故に衆生が無ければ、仏の正覚を成ずることも、またその意味もあり得ないことになるのである。

以上、恒順衆生願とは、老若男女、善悪などを問わず、一切衆生の差別に随順して、それぞれ承事供養し、如来と等しく平等に衆生を饒益せんとする大願をいうのである。

十、普皆廻向願

廻向とは、自らが積んだ、または修行した善根功德を衆生のためにふり向けることである。あるいは、仏の功德を衆生にめぐらして与え給えることである。故に廻向は必ず願を兼ねているのである。『疏』では、

「初標名。廻謂_二廻転_一。向謂_二趣向_一。廻已修善。向於三處。謂實際菩提及與衆生。」（正統一・七・四・三八二、左上）

と述べている。廻とは廻転、廻施の義でめぐること、向は趣向の義で因より果に向うことで、就中、廻って善を修するのに、實際・菩提・衆生の三處に向うといふのである。『鈔』では更に、

「一廻^レ自向^レ他。二廻^レ少向^レ多。三廻^ニ自由行^ニ向^ニ他因行^一。四廻^ニ因向^レ果。五廻^ニ劣向^レ勝。六廻^ニ比向^レ證。七廻^ニ事向^レ理。八廻^ニ行布行^ニ向^ニ円融行^一。九廻^ニ世間^ニ向^ニ出世間^一。十廻^ニ順理事^ニ向^ニ理所成事^一」(記統一・七・五・四七四、左下)

と十の廻向に別け、この中、一・二・三を衆生、四・五・六及び九を菩提、七・八を實際、十は三處に通ずとしてゐる。つまり、菩薩の衆生教化に向けての大悲が衆生廻向であり、衆生に菩提を成就せしめる上求菩提の大智が菩提廻向であり、盡法界に廻向し、衆生及び菩提が不離となる相が實際廻向である。菩薩の廻向はこの三種を離れず、而も衆生廻向を中心に他の二廻向が関係し合っているのである。

斯かる廻向について、『經』では、

「願令^下衆生常得^ニ安樂^一。無^中諸病苦^上。欲^レ行^ニ惡法^一皆悉不^レ成。所修善行。皆速成就。関^ニ閉一切諸惡趣門^一。開^ニ示人天涅槃正路^一。若諸衆生。因^ニ其積^ニ集諸惡業^一故。所^レ感一切極重苦果。我皆代受。」(大正10・346・b)と説いている。今、特に新訳八十卷本「十廻向品」では十種の廻向を説いている。

- 一、救護衆生離衆生相廻向。
- 二、不壞廻向。
- 三、等諸仏廻向。
- 四、至一切處廻向。
- 五、無盡功德藏廻向。
- 六、隨順大果堅固善根廻向。
- 七、等心隨順一切衆生廻向。
- 八、如相廻向。
- 九、無縛無著廻向。
- 十、法界無盡廻向。

今、『貞元經』に当てていえば、

衆生に安樂を得せしめ、諸々の病苦の無いようにせしめることを願うのが第一廻向、惡法を行ぜんと欲することを悉く成ぜさせず、反対に所修の善業を速やかに成就することを第五廻向、一切諸々の惡趣門を關閉して涅槃の正路を開示することを第七廻向、諸々の衆生が惡業を積集し、感ずる所の一切極重の苦果は我れ皆代つて受けんとする代受苦を第一廻向の四義にそれぞれ当てはめることができるであらう。

以上、普皆廻向願とは、第一礼敬、第九恒順に至るまでの所有の功德を皆一切衆生に廻向して、安樂を得て無上菩提を成就せんことを願うことである。

おわりに

さて、『普賢行願品』第四十の長行文に於ける「普賢の十大願」の概観についてみてきた訳であるが、『經』では更に続いて偈文として重ねて十大願を頌し、また、別して「十地品」初歡喜地に於いて既に説かれた菩薩の十大願が頌されるのである。(但し「十地品」の十大願と順序は異なる)

そもそも、この十大願は、澄觀の分析によれば、善財会の第五願因広大相の第五重示普因分に配せられ、更にそれは第一正顯普因分、第二顯經勝德分、第三經勸受持分に分析されている。今、「普賢の十大願」は、その第一正顯普因分に於ける長行文に於いて説かれていた。『經』では更に第二、第三と説示されることになるのであるが、

その長行文の三分に应じて、偈頌が順次に配釈されることになるのである。今、この長行と偈頌の対応の意義、内容配列に関して、例えば「普賢の十大願」の説かれた後「十地品」で明らかにされている菩薩の十大願が、何故重頌されなければならないのか。そういう品解釈上の複雑な問題を感じたのであるが、斯かる課題は未解決のまま残ってしまった。ただ、今は、特に自利利他円満たらしめる大乘菩薩道を修することに於いて、その中心が普賢の空觀の大悲に於いて始めて可能となることが知らされた。それは教化衆生上求菩提を願って止まない一切菩薩の行願に他ならないからである。

以上、「普賢の十大願」は、菩薩の自行、並びに利益衆生の事に関して、一々広大にして盡未來際の要誓を願立することを説いたものであるということでは今はひとまず稿を綴じたいと思う。

(一九八五・四・十八)

△本稿作成に当り、花山大安述『華嚴經普賢行願品講義』（昭四、安居）に負うところが極めて多かった。
記して謝意を表すと同時に、本稿の不備とあわせて参照頂ければ幸である。▽

註

(1) 拙稿『華嚴經「淨行品」について』（東海仏教第28輯、昭58・7）を参照されたし。

(2) 拙稿「華嚴經に於ける菩薩の十大願について」（同朋学園仏教文化研究所紀要第六号・一九八四・十二）を参照頂ければ

『華嚴經』に於ける普賢の十大願について

幸である。

- (3) 望月信亨著「浄土教の起源及発達」五三八頁参照。(昭47・山喜房仏書林)
- (4) 当初、(1)、華嚴行願品重頌(六十二頌)(2)、普賢菩薩行願讚(不空訳・六十二頌)(3)、文殊師利發願經(東晋仏陀跋陀羅訳四十四頌)(4)、三曼陀跋陀羅菩薩經の四訳対照をする予定であったが紙面の都合でできなかった。なお(1)(2)(3)の三訳対照については既に花山大安述「華嚴經普賢行願品講義」(昭四安居)の附録に記されているので参照されたし。
- (5) 高峯了州著『華嚴論集』八、普賢行願品解釈の問題、二四五頁。(昭51、国書刊行会)
- (6) 特に「経題」については、拙稿「華嚴經に於ける信の位置」(仏教文化研究所紀要・第三号・一九八一)の「二、仏陀華嚴」の項(九三頁〜九八頁)を参照頂ければ幸である。
- (7) 高峯了州著『華嚴論集』・六普賢行の二〇九頁を参照(昭51・国書刊行会)
- (8) 高峯了州著「華嚴孔目章解説」の「普賢行品普賢章」一八八頁〜一八九頁参照(昭39・南都仏教研究会)
- (9) 前掲(6)の二一五頁。
- (10) 七種の礼については、『法苑珠林』第二十致敬篇儀式部第七(大正53・435・a〜436・a)に「第一名我慢憍心礼、第二唱和求名礼、第三身心恭敬礼、第四発智清淨礼、第五遍入法界礼、第六正観修誠礼、第七実相平等礼」と説示している。因みに、龍樹も智度論卷百(大正25・751・a)で「礼有三種。一者口礼。二者屈膝頭不_レ至_レ地。三者頭至_レ地。是為_二上礼_一。」と三種の礼について述べている。
- (11) 澄観は『華嚴經疏』第二十七(大正35・706・b)に於いても十礼について述べている。
- (12) 望月仏教大辞典第三卷二三八九頁中「十大願」の項を参照。以下の九願についても同様。
- (13) 『金剛般若波羅蜜經』に「若有_レ人言如来若来若去若坐若臥。是人_レ不_レ解_二我所説義_一。何以故。如来者無_レ所_二從來_一亦無_レ所_二去故名_二如来_一」(大正8・752・b)と説く。
- (14) 『大般涅槃經』卷第十八に「云何名如来。如過去諸仏所説不變。云何不變。過去諸仏為度衆生説十二部經。如来亦爾。故名如来。諸仏世尊從六波羅蜜三十七品十一空來至大涅槃。如来亦爾。是故号仏為如来也。諸仏世尊為衆生故隨宜方便開示三乘。壽命無量不可称計。如来亦爾。是故号仏為如来也。」(大正12・468・a〜b)と説く。
- (15) 『成実論』卷第一に「如来者乘_二如実道_一。来成_二正覺_一故如来」と説く。

(16) 特に懺悔については、中村元著「仏教語大辞典」四九七頁C、Dを参照。

(17) 今、事理二懺について、「隨行品」の「昔在地獄。地獄及身。非十方來。但由於汝顛倒惡業。愚癡纏縛。生地獄身。此無根本。無有來處」(大正10・250・a)の文により事懺とし、『觀普賢菩薩行法經』の「若欲懺悔者。端坐念実相。衆罪如霜露。慧日能消除。」(大正9・393・b)の文により理懺としている。

(18) 『仏名經』卷第一に「先當興七種心以為方便。然後此罪乃可得滅。何等為七。一者慚愧。二者恐怖。三者厭離。四者發菩提心。五者怨親平等。六者念報仏恩。七者觀罪性空」(大正14・188・b)と述べ、以下、七心の一々について詳説しているをみる。

(19) 隨喜については、中村元著「仏教語大辞典」一八〇八頁bを参照。

(20) 特に分布舍利については、『大唐西域記』卷第八(大正51・911・b)に詳説せり。

(21) 因みに法蔵は『探玄記』で、「前中転法輪義略作十門。一釈名、二弁体、三種類、四転相、五分齊、六転處、八転時、八転入、九転機、十諸門」(大正35・153・c)と十門に分けそれぞれに説明を加えている。

(22) 娑婆について法蔵は『探玄記』で「娑婆此云堪忍。悲華經云。是中衆生貪瞋癡等過梵王忍之故為名也」(大正35・171・a)と述べている。

(23) 毘盧舍那については、同じく『探玄記』で「盧舍那者此翻名光明照。毘者此云遍。是謂光明遍照也」(大正35・146・c)と述べている。

(24) 菩薩は平等に饒益を願っているのに現実には貧困病苦のあることについて、法蔵は『探玄記』で、「一菩薩見下衆生貧不_レ作_レ惡業。富即作_レ惡業。二衆生貧即修_レ福富即障_レ善。三衆生貧即厭_レ生死心現前富即不_レ厭。四衆生貧即慈善富即憎_レ惡他人。五衆生貧即不_レ能_レ害_レ衆生命。富即損_レ害他命」(大正35・264・a)と五義挙げて述べている。

(25) 『華嚴經行願品疏』卷十(巳統一・七・四・三八〇、右上、右下)参照。

(本学非常勤講師・仏教学)